

吉本隆明氏、新新宗教を語る

統一教会(世界基督教統一神霊協会)、オウム真理教、幸福科学……と二時期、社会的に大きな話題を集めた「新新宗教」。これらの宗教は、若者たちをひきつけるのか。思想家の吉本隆明氏がこのほど京都精華大でつづいた講演をリポートする。

この講演で吉本氏は、有交友レントの合同結婚式参加などで話題になった統一教会について「キリスト教の教義と東洋の易学的な陰陽説の融合」、また幸福科学については「愛の段階(キリスト教)と八正道(仏教)を連結して人間を愛する心がけを説いている」と指摘。「ヨーガの瞑想まがや、生死を越える」というオウム真理教を論じて、それらの特徴を「『新新宗教』の主題者たちはみんな超人的な体験を前面に出し、そこから『入真の幸福』を求めている」と説明した。

かつて戦争中から戦後にかけて起こった個個学会などの「新宗教」は、戦後の混乱の中で「いまや『生きた宗教』のなかで『なにが正しいのか』と云った『論理』を前面に出してはたが、そこには貧困からの脱出という切実さがあった。しかし、九割中流」といわれる豊かな社会に

拮抗できる社会的倫理を

なつた現代、倫理的な道徳の基準はあいまいになり、入真人間の世間の中で幸福があると考えられるようになった。むしろ動きは、中世における中流、中上流、中下流、口遊秀、曹洞宗など当時の新興宗教「ムツシ」の方向をとり、吉本隆明氏も「法然、親鸞は正統的な修行を怠らなかつたからである」と指摘した。また、普通の人々を公認して生きていくという入真倫理を問うか、どうしたかというのである。

これに吉本氏は、日本のよりよい社会を建設する中で「新新宗教研究」のなかで、オウム真理教の教義を批判して、幸福の概念を提供している。「私が、そのなかで『私たちが拮抗できる倫理を』と語った。

△超人的な世間へを打ち出して幸福への近道を探るのではなく、階級を乗り越えてきた社会でいかに生きることが、入真倫理への正統な立地であるか。新しい道徳を打ち立てる入真倫理として世界史的な課題を吟味の限り、日本人の自立の拠点をめざす道徳的実践ではないだろうか。

(半) 中 池田和隆



「新新宗教」について講演する吉本隆明氏